



えと文

竹中三郎

幡技窯跡の見学

先日、私の住居から山一つ向うの幡技より、古代の窯跡や土器が出たということが新聞に出てからのことでもあります。

鎌倉におられる里見勝蔵先生より、出土した古い土器と、現代使用している真白で形の整った土器を見てみると、おそらく各時代の人は、前代よりよりよい土器を得るつもりで造つて来たのだらう。けれども長い時代をこうして振り返つて見ると、必ずしも新しくなる程よくなつていゝとは思えない。絵に關しても同じような問題があるのではないか、というようなことを書いたお手紙を頂きました。

びつくりして何はともあれ、それらの土器を系統的に見なければと思つて、先日、京都大学の考古学教室を訪れて、丁度、今熱心に幡技出土土器を整理している若い研究者の懇切な説明を聞かせて頂くことができました。

ここからは、単弁の蓮華文瓦の破片が出て、それは北野廃寺跡より出土したものと同じものであり、また大和の飛鳥寺のと同じものでした。

そしてそれらは赤土色をしているのもあり、黒く焼けているのもあり、土の中にふくまれている鉄分による窯変の美しい色を見せていました。

しかし残念ながら、出土土器はあまり見ることが出来ず、これは窯跡とは関係なく、ずっと上の層から出るもので、時代ももつと新らしく、藤原まで上るでしょうかとのことでした。

早速その足で発掘現場を見に行きましたが、これはまた、ブルドーザでえぐり取られた、すばらしい赤土の丘が目についただけでした。けれども、あのうす暗い室で蓮華文瓦と一緒に見た高環の残欠のすんなりとした美しい型が、妙に印象づよく今も目に残っています。

(自由美術家協会会員)